

地域のみな様と、私たちをむすぶ広報誌



京都中部総合医療センター

Kyoto Chubu Medical Center



CONTENTS

- 院長挨拶 ①
- 退任のご挨拶 ②
- 赴任医師のご挨拶 ③
- 第3回 南丹カップ ⑤

- 臨床研修指定病院としての役割 ⑥
- 院内災害訓練と
近畿DMATブロック訓練 ⑦
- 診療科紹介 整形外科 ⑧
- 近隣の連携医療機関の先生方 ⑨
三木歯科医院 げんの耳鼻咽喉科

- カンボジアの手術活動に参加して ⑩
- 当院の救急医療体制 ⑩

地域医療支援病院 臨床研修指定病院
救急告示病院 日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療病院 第二種感染症指定医療機関
地域周産期母子医療センター ヘき地医療拠点病院
京都府地域リハビリテーション支援センター
京都府災害拠点病院 (地域災害医療センター)
DMAT指定医療機関 認知症疾患医療センター
エイズ拠点病院 京都府難病医療協力病院

京都中部総合医療センター

〒629-0197 京都府南丹市八木町八木上野25番地
TEL 0771-42-2510代 FAX 0771-42-2096
<http://www.kyoto-chubumedc.or.jp>





2019.4
Vol.42
春号

病院の理念

地域の拠点病院として、患者さん中心の良質な医療を行い、地域に愛され信頼される病院を目指す。

病院の基本方針

1. 常に患者さんの立場にたち、権利を尊重して医療を行います。
2. 地域の医療、介護や福祉等との連携を推進し、最終拠点病院であるとの認識に立って地域支援に努めます。
3. 救急医療体制を充実し、いつでも安心して受けられる医療を目指します。
4. 集学的医療の提供を推進し、地域で完結できる高度ながん医療を行います。
5. チーム医療を強化し、医療の質や安全性の向上のため、全ての職員が資質の向上に努めます。
6. 公営企業としての役割を果たすため、経営の効率を高め、健全な経営に努めます。

患者さんの権利と責務

私たちは患者さんの権利を尊重し、十分な説明と合意に基づいた医療を行います。

1. 説明を受ける権利
2. 治療を選択する権利
3. 情報を知る権利
4. 個人匿名の保護を受ける権利
5. 自分の健康情報を正確に提供する責務
6. 説明を理解するまで問う責務
7. 病院での規則に従う責務

院長挨拶

桜咲く季節に

院長 辰巳 哲也



さわやかな梅の香が漂う季節が過ぎ、今年もまた桜の花が満開に咲き誇る春が訪れました。さわやかな春風の中、皆様におかれましては健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。

さて4月より2019年の新年度が始まりました。今年5月に新元号への変更や10月に消費税の増税が予定されています。国は社会保障における「2025年問題」（介護・医療費などの社会保障費の急増）から、さらに先をみた「2040年問題」を真剣に言及し始めたようです。2040年には85歳以上の人口が高齢人口の3割近くになって、高齢世代がさらに高齢化します。単独世帯も増え、高齢世代の困窮化や孤立化とともに、高齢者を支える現役世代が数の上でも生産性でも弱体化する状況が予測されています。また、東京圏と地方の「人口不均衡」が限界に達するとも予想されており、人口の減少と高齢者の急増、労働力不足などで社会保障制度の維持がかなり厳しい局面を迎えることになります。我々は20年後に来るであろう深刻な課題を直視して、社会保障や雇用、街づくりなどを横断的に議論していかなければならない時期になっているのかもしれないと思います。

1月号で案内しましたように、6月9日に第54回京都病院学会が池坊短期大学で開催されます。多くの御施設の御協力で、応募演題数が過去最高の507題に上りましたことを心から感謝申し上げます。基調講演では東京大学の秋山弘子先生に「長寿社会の課題と可能性」についてお話しを頂き、特別講演では産業医科大学の松田晋哉先生に「京都府における地域医療構想と地域包括ケアの課題」と題してお話しをお願いしています。一般演題の他には、要望演題「地域包括ケア充実に向けた医療連携」、継続演題「人生の最後により添う」などを予定しています。活発な議論がなされ「2025年問題」を乗り越え「2040年問題」へのヒントが込められた実りある学会にしたいと存じますので、是非とも多くの御参加をお待ちしています。

京都中部総合医療センターは今年1月より「地域医療支援病院」として歩み始めました。今後も多くの医療関係者の方々と地域連携・協調を益々推し進め、効率的な医療を提供することで、地域包括ケアの充実に向けて取り組みたいと思います。4月からはまた多くの新しい仲間達を迎えました。医師部門では数年間常勤医師が不在であった脳神経外科へ白戸充先生に赴任していただくことになり、脳卒中診療や脳腫瘍、外科系救急医療においても大いに活躍していただけることを期待しています。また乳腺外科の常勤医師として小谷達也先生に赴任していただくことになり、乳腺疾患の診療がさらに専門性を増して充実することと存じます。循環器内科、腎臓内科、消化器内科、呼吸器内科、脳神経内科、小児科、消化器外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、麻酔科、歯科口腔外科はメンバーが変わります。4月から勤務いただけるすべての職員の皆様には、心からの歓迎と今後の御活躍を期待しています。

京都中部総合医療センターは地域医療支援病院としての責任と自覚を持ち、最適な医療を住民の皆様提供するため、職員一丸となって頑張りますので、今後とも皆様の御協力と御支援を賜りますようどうか宜しくお願い致します。

今年も皆様の春がさわやかで心暖かなものでありますようにお祈りしております。

退任のご挨拶



副院長・外科部長・健診センター長 ^{つかもと けんじ} 塚本 賢治

平成17年3月1日に当院へ赴任し、以来14年1ヶ月お世話になり本当に有難うございました。前任者の^{なか し けいすけ}中路啓介先生が急逝され、6ヶ月後に私は着任しました。着任当時、南丹病院は地域唯一の総合病院でしたが、予約制もなく、患者サービスも充分とはいえない病院でありました。反面、職員間の仲は良かったことを思い出します。着任当時の院長は厳しい先生で、一つ意見をいうと百ぐらい怒られ、いろいろ勉強させていただきました。私の本職は外科医で、専門は消化器外科（特に肝胆膵外科）でした。しかし、病院に乳腺外科医が不在であり、私が乳腺外来をしていたため、職員の中には私を乳腺外科医と思っておられる方もいると思います。外科の責任者の時は良き後輩諸兄、病棟や外来、手術室ナースに恵まれ、楽しい時間を過ごさせていただきました。本当に有難うございました。

平成23年4月からは公立南丹看護専門学校の校長を7年間務めました。看護の世界が全く解らないまま、看護教員先生方の庇護のもと、辛うじて全うすることができました。本当に有難うございました。

14年1ヶ月の間に、その名称も公立南丹病院から京都中部総合医療センターへと変わりました。患者サービスも格段に向上しました。研修医の先生もテレビで見るようなユニフォームを着てカッコよくなりました。これからもますますの発展を願っています。



薬剤部長 ^{わだ あつし} 和田 淳

このたび無事に定年退職を迎えることができました。昭和59年に入職してから、35年間勤務させていただきました。この間、薬剤部の皆様や様々な部門の方々に、一方ならぬご支援をいただき、無事にこの日を迎えることができましたことに心より感謝いたします。

この35年を振り返ってみれば、病院薬剤師の業務は大きく様変わりしました。入職した当時は院内処方調剤が主な仕事でありました。国の施策で院外処方にシフトし、病院薬剤師の業務は調剤業務から病棟薬剤業務に大きく変わりました。当院でも病棟に薬剤師が配置され、私が入職した当時の薬剤師が6名であったのに対して、現在は23名と大幅に増えております。

病院薬剤師はチーム医療の中で医薬品の安全と医療経済への貢献が求められています。初めて病棟に赴いて服薬指導を行ったのは私で、そのときはただお薬の説明をするだけで終わったことを覚えています。今の業務と比べるとまったくお粗末なものでありました。患者さんから沢山のことを学び、大切なことを教わったことが忘れられません。私は患者さんに育てていただきました。

そして在任中、電子カルテの前身である処方オーダーリングの立ち上げ、後発医薬品の選定、医学研究審査の事務局、学術集会等に携わらせていただいたことに感謝するとともに、当院で薬剤師として過ごすことができた自分の幸運を思わずにはいられません。

最後になりましたが、当院の益々の発展を祈念しますとともに、皆様方のご多幸を心からお祈りする次第であります。

赴任医師のご挨拶

乳腺外科

部長 ^{こたに たつや} 小谷 達也 (昭和62年卒)

京都府立医科大学を卒業して第一外科に入局し、消化器・一般外科というスタイルの外科医として育ちました。平成11年に国立がんセンターで乳腺外科研修をする機会を得たのち済生会京都府病院で乳腺外来を立ち上げました。当初は消化器と掛け持ちでしたが乳癌患者さんが多かったため平成24年からは京都第一赤十字病院で乳癌診療に専門的に関わってきました。私にできることは病氣と闘う患者さんの幸せを心から願って一人ひとり丁寧に診療することだけです。何卒よろしくお願い致します。



脳神経外科

部長 ^{しらと みつる} 白土 充 (平成5年卒)

得意分野は脳血管内治療といい、カテーテルという細い管を血管内に進めて治療を行うもので、体を切らずに脳卒中治療を行う分野であります。脳卒中治療はここ数年で格段の進歩があり、最新の治療を皆様にご提供できるよう努力してまいります。どうぞ、よろしくお願い致します。



外科・消化器外科

副部長 ^{いいたか だいすけ} 飯高 大介 (平成16年卒)

今まで腹腔鏡下大腸切除を中心に、消化器・一般外科を担当していました。その経験を活かしながら、がん治療や手術治療のみならず救急医療まで南丹医療圏の地域医療に貢献できるように、精一杯頑張りたいと思います。至らぬ点もあるかと思いますが何卒宜しくお願いいたします。



医長 ^{きむら ゆう} 木村 雄 (平成18年卒)

済生会滋賀県病院、福知山市民病院、京都岡本記念病院等で勤務してきました。今までの経験を生かして、手術を中心に少しでも地域の医療のお役に立てるようにしたいと思えます。よろしくお願い致します。



腎臓内科

^{うえはら まさひろ} 医員 上原 正弘 (平成21年卒)

昨年度まで京都府立医科大学附属病院で大学院生として基礎研究と臨床業務に携わっておりました。それ以前は京都府立医科大学を卒業後、沖縄県で救急総合診療、神奈川県で腎臓内科専門研修を行い研鑽を積んでまいりました。丁寧でわかりやすい診療を心がけ、少しでも地域の皆様のお役に立てるよう精進してまいります。よろしくお願い致します。



^{うらた のりこ} 医員 浦田 倫子 (平成24年卒)

昨年度までの京都府立医科大学附属病院での勤務を経て、2年ぶりに京都中部総合医療センターに赴任させていただきとなりました。医師として育てていただいた医療圏で、また働かせていただけることを大変嬉しく思います。丁寧な診療を心掛け、地域の皆様のお役に立てるよう頑張りますのでどうぞ宜しくお願い致します。



消化器内科

^{さわ たかゆき} 医員 澤 貴幸 (平成29年卒)

当院での前期研修医の2年間を経て、勤務することとなりました。至らぬ点ばかりで、ご迷惑を多々おかけするかと思います。南丹医療圏の皆様のお役に立てるよう精一杯精進致します。どうぞよろしくお願い致します。



呼吸器内科

^{よしだ りえ} 医員 吉田 理愛 (平成29年卒)

私が心がけているのは、患者さんの立場に立って診療させていただくということです。症状をしっかりと聞き、診療方針なども納得いただけるまでご説明いたします。地域の皆様のすこやかな毎日を応援するため、慢性の病氣や生活習慣病などの予防にも力を注いでいきたいと思っていますので、安心して気軽に受診いただければ幸いです。医師としての経験は浅いですが、責任を持って務めさせていただきます。よろしくお願い致します。



脳神経内科

^{よこで あきのり} 医員 横出 晃能 (平成28年卒)

神経内科疾患である認知症と脳梗塞は平成28年度の要介護の原因となる二大疾患となりました。医療だけでなく介護・福祉の点からも神経内科の役割はより重要になって来ていると感じます。未熟ではありますが、地域の皆様の一助となれるよう精一杯努力致しますので、よろしくお願い申し上げます。



循環器内科

医師 ^{わだ なおとし} 和田 直敏 (平成22年卒)

三重大学卒業後は京都第一赤十字病院で初期研修を行い、循環器内科医として近江八幡市立総合医療センターで研鑽を積みました。昨年度まで京都府立医科大学大学院で研究をしていました。循環器疾患を中心に地域医療に貢献して参りたいと思います。よろしくお願い致します。



医師 ^{たさか さとし} 田坂 聡 (平成29年卒)

京都中部総合医療センターでの2年間の研修を経て、当院に赴任することとなりました。まだまだ至らぬ点も多く、皆様にご迷惑をおかけする事も多々あるかと存じますが、南丹医療圏における皆様の健康増進にお役立てできるよう、精一杯精進して参ります。何卒宜しくお願い申し上げます。



耳鼻咽喉科

医師 ^{よしざわ こういち} 吉澤 宏一 (平成28年卒)

昨年度まで京都府立医科大学附属病院に勤務しておりました。明るく丁寧な診療を心がけます。微力ですが地域の皆様のお役に立てるよう日々精進して参る所存です。何卒宜しくお願い申し上げます。



泌尿器科

医師 ^{たかだ いっぺい} 高田 一平 (平成28年卒)

外来にしろ手術にしろまだまだ未熟ではありますが、精一杯努めさせていただきます。いつでも気軽にご相談下さい。よろしくお願い申し上げます。



眼科

医師 ^{みずの のぶひと} 水野 暢人 (平成26年卒)

平成26年度金沢医科大学を卒業し、京都府立医科大学附属病院研修後、眼科学教室に入局、一年間は大学病院、去年までは京都第一赤十字病院で勤務しておりました。出身は大阪の枚方で、大学時代はサッカー部に所属しておりました。医師としてまだまだ未熟な身で色々ご迷惑をかけることもあると思いますがどうかよろしくお願い致します。



小児科

医師 ^{とみい としひろ} 富井 敏宏 (平成20年卒)

これまで小児科医として血液疾患を中心に研鑽を積み、昨年度までは研究を行ってきました。兄が以前に当院の脳神経内科で働いており、同じ病院で働くことが出来るのも何かの縁だと感じております。これからは地域の小児医療に貢献できるように頑張りますのでよろしくお願い致します。



医師 ^{ごうだ たけし} 合田 武司 (平成26年卒)

こちらで働かせていただくのは、初期研修の2年を過ごしてから4年ぶりになります。初期研修後に、小児科医になってからは大学病院と舞鶴医療センターで勤務し、特にこの2年間は新生児や食物アレルギーの分野に携わる機会が多かったのですが、一般小児科といえどもまだまだ学ぶべきことが多いと感じております。医師としての原点を学んだ当院で再び働くことは楽しみな反面、かつてとは違う立場での勤務ですので緊張もありますが、地域に少しでも貢献できるよう精進して参ります。どうぞよろしくお願い致します。



医師 ^{いくしま りょう} 生嶋 諒 (平成27年卒)

これまで小児科専攻医として、京都市立病院や京都府立医科大学附属病院にて研鑽を積んでおりました。微力ではありますが、地域のお子様の健康増進に貢献できますよう日々、精進致します。どうぞよろしくお願い致します。



歯科・口腔外科

医師 ^{よこい さとし} 横井 聡 (平成26年卒)

京都府立医科大学附属病院で2年間勤務しておりました。まだまだ未熟者ではありますが、少しでもお役に立てるよう、また安心して医療を受けていただけるように日々精進してまいりますので宜しくお願い致します。



麻酔科

医師 ^{おぎの そうすけ} 荻野 壮輔 (平成26年卒)

昨年度まで近江八幡総合医療センターにて勤務しておりました。地域の医療に貢献できるよう精進致します。よろしくお願い致します。



第3回 南丹カップ

「第3回 南丹カップ」を開催して

救急看護認定看護師 ^{まえだ えりこ} 前田 絵理子

私たち看護師に求められる役割は、患者さんの状況により様々です。必要となる知識や技術は幅広く、所属している部門だけでは経験できないことも多くあります。しかし、研修会に参加したり参考書を読んだりするだけではイメージしにくいこともあり、実際に近い状況を作り出した体験型の研修会がすすめられています。

様々な看護場面を想定し、部署毎の看護チームがその課題を攻略していく競技会「南丹カップ」も、今回で3回目となりました。今回は医師や看護学生も含め、87名のスタッフが参加し、平成30年11月25日（日）に開催しました。

チームワークを高め楽しく取り組めるよう、前回から「チームビルディング」を取り入れています。「チームビルディング」とは「仲間が一丸となって一つのゴールに向かって進んでいける組織づくり」のことです。今年度は「売れなくなったダイエット器具を売るために様々な方法を考える」をテーマに、プレゼンテーションを行いました。想定された看護場面での対応はもちろん、このようなチームビルディングもスタッフがお互いの長所を知る機会となり、チーム力の向上につなげることができました。

今後も、楽しみながら実践に活かせる研修会を企画し、よりよい看護を目指して取り組んでいきたいと思っています。



「第3回 南丹カップ」に参加して

第二病棟2階西病棟 ^{のむら れい} 野村 玲

南丹カップの種目は、実際の現場で起きた症例を基に構成されていると知り、自分が経験したことがないことを学べると思い参加しました。各種目は、やはり経験したことのない状況ばかりでしたがとても臨場感があり、実際の臨床の場をイメージすることで、状況から何が考えられるか、予測すべきことは何か、そのうえで自分はどう行動すべきかを真剣に考えて学ぶことができました。まだまだ経験不足を実感していたため、各種目で多くの経験ができる南丹カップは非常に有意義でした。

日々の勤務の中では業務に追われ、他の看護師と患者さんの関わりをじっくりと目にする機会が少ないですが、各種目を通してチームメンバーの看護にも触れることができました。模擬患者さんとの関わり方や、起こっている状況を把握するための考え方など、互いに多くを学びあうことができたと感じています。看護観が人それぞれ違うように、得意・不得意とする分野も異なりますが、各種目を通してメンバーの尊敬できるところをより多く知ることによってチーム間の信頼向上にも繋がったと思います。信頼関係があるからこそ、頼ることができ、一人では限界があることも互いの長所を引き出し、補い合うことで、より質の高い看護を提供することができると実感しました。

チームで協力して多くを学べたことは「患者さんの力になりたい」「適切で安全な医療や看護を提供したい」という思いがあったからこそだと思います。その思いを実現するためには、日々学び続けなければいけないということも実感しました。今後も、より質の高い適切な医療が提供できるようチームで励んでいきたいと思っています。



「第3回 南丹カップ」に参加して

公立南丹看護専門学校 1年生

私はフィジカルアセスメント*のブースに患者役として参加させていただきました。そこでは2つの事例に対し、1チーム3名程度でどのように判断しどう援助するのかをみるものでした。

1つは、総胆管結石が原因の急性胆嚢炎を想定した患者さんで、問診、視診、聴診、触診と順を追って冷静に行われる情報収集に驚きました。その中で、保温に気を使い丁寧に布団を掛けたり、優しく話しかけてくださったりと、看護師さんの優しさを感じることができました。さらに「おそらく胆嚢炎じゃないか？」というところまで答えを出されているチームもあり、すごいなと只々驚くばかりでした。

もう1つは、誤嚥性の呼吸困難を想定した患者さんでした。右半身麻痺の患者さんで、左肺の下葉に痰が溜まり呼吸苦を示しているというものでした。聴診の際、患者さんの腹部上面にしか聴診器を当てない方が多いとのことでしたが、上面からでは肺下葉の音は拾えないため、背部からの聴診が必要であることを学びました。また、今回の場合、左肺が上側にくるような体位にし、早急に痰を出してあげないといけないということでした。麻痺側だから下にはいけないという、何となく自分が持っていた知識が必ずしも正しくないことを知ることができました。

その他にも、必要に応じて人を呼ぶことや、医師などへの報告の仕方なども学ぶことができ、非常に有意義な時間だったと思います。

※フィジカルアセスメント…問診、視診、聴診、打診、触診などを用いて患者さんの情報を集め、分析し、患者さんに合ったケアを考察すること。

臨床研修指定病院としての役割

かねまさ ひでとし
臨床研修管理委員会副委員長・消化器内科部長 金政 秀俊



当院が臨床研修指定病院であることはご存知でしょうか。診療に従事するすべての医師は臨床研修を受けなければならないと法律で定められており、当院はその研修場所として指定されています。平成31年2月現在、医師になって1から2年目の研修医（1年目5人、2年目5人の計10人）が先輩医師と共に普段の診療業務にたずさわりながら、将来、一人前の医師になるべく仕事、研修に励んでいます。

彼らは各診療科を順次まわりながら、各科の専門的高度な医療知識を経験、習得するとともに、医師として医学及び医療の果たすべき社会的役割や医療人として必要な基本姿勢や態度、心構え、基本的な診療能力を学んでいます。また救急の現場や夜間当直にも参加し救急医療、地域医療の実態を学んでいます。

研修医の毎日は忙しく、戸惑うことや、迷い、悩むこともありますが、周囲の人たちにも助けられ、元気に伸び伸び研修をしています。また、院内で開催される勉強会や研修会にも積極的に参加し、貪欲に知識の吸収に励んでいます。

病院としましては、研修医に十分な指導教育体制を整えることが必要であり、大変な面もありますが、若い医師の多い病院は活気もあり、当院にとって研修医の存在は大きいと考えています。また先輩である上級医や指導医は彼らの教育に関わることで、さらに自分自身の研鑽にもつながっており、相乗効果がみられます。今後も多くの研修医が当院での研修を経験し、将来この地域の医療を担ってくれる医師が育ってくれることと期待しています。

院内災害訓練と近畿DMATブロック訓練

副院長・救急部長 計良 夏哉^{けいら なつや}

平成31年2月3日（日）に京都府主催の近畿地方DMAT（災害派遣医療チーム）ブロック訓練に併せて大規模な院内災害訓練を行いました。京都市花折断層帯の地震による被災想定で、府の北中部は南ほど被害が大きいのものです。当院は災害拠点病院として地域の患者を受け入れるほか、DMAT活動拠点本部が設置され、京都府、兵庫県、大阪府から医療チームが派遣されました。病院には災害対策本部を設置し、運び込まれた多数の患者に対し、他院のDMATと協働して模擬診療にあたりました。当院は8年が経過した東日本大震災、平成28年の熊本地震、昨年の大阪北部地震などにDMATを派遣して参りました。この地域で局地災害が起こった場合、支援チームに地域住民のために働いていただく段取りを「受援」と言い、災害拠点病院に求められる重要な内容ですが、本訓練を通じて検証することができました。協力いただきました亀岡市立病院、明治国際医療大学には厚く御礼申し上げます。



看護師^{にしむら ようこ} 西村 陽子

近年、自然災害も増え緊急時の対応について考えさせられる場面も多くなっています。今回私は「仮想ICU」に配属になり、第二病棟5階の講堂で救命活動を行いました。普段は講堂として使用している場所ですが、実は酸素の中央配管の設備があり、患者を受け入れる場所として機能します。

災害時に重要とされる行動の1つに情報の伝達が言われています。訓練に参加し、情報のやり取りを行う中で、改めて情報伝達の難しさや連携の大切さを痛感しました。実際の災害時には想像以上に現場は混乱し、スタッフが戸惑うことも多くなると思います。そのような事態に対応できるよう日頃から緊急時を想定した訓練が必要だと思いました。

臨床工学技士^{おお た かつひこ} 太田 勝彦

仮想ICUを中心とした訓練に参加し、実際に起こりうる事例を現実的な時間経過で体験する貴重な経験でした。

訓練では患者到着時の搬送介助、クラッシュ症候群治療の血液浄化療法、急性心筋梗塞に対する緊急カテーテル治療といった内容があり、災害による外傷だけでなく、その他の緊急患者対応も必要となることを再認識しました。

災害時は人員や医療資機材が限られており、迅速に効率よい行動が必要であること。そのために臨床工学技士として、生命維持管理装置の操作や医療機器の所在把握・医療機器メーカーとの連携等、臨機応変の必要性を知る有意義な訓練となりました。



整形外科部長 ふじ わら やす ひろ 藤原 靖大



整形外科とは運動器を専門に扱う診療科で、脊椎・四肢の骨、関節、神経、筋肉、靱帯、腱など扱う臓器が多部位にわたります。現在当科では常勤医師7人で担当していますが、大まかに脊椎班と関節班に分かれており、骨折などの外傷は全員で協力して取り組んでいます。

整形外科の手術件数は、平成29年（平成29年1月1日～同年12月31日）の1年間で591症例でした。その内で骨折に関する手術が最も多く252症例（抜釘術を除く）で、次いで多かったのが脊椎に関する手術で132症例でした。

南丹医療圏だけでなく福井県大飯高浜などの嶺南、兵庫県篠山などを含めた地域で当院が脊椎専門医が複数在籍している唯一の施設ですので、これらの地域から患者さんが集まってこれ、脊椎手術の数が多いのは当院の特徴となっていました。

そのために脊椎脊椎病疾患センターを立ち上げ、小倉卓先生、林田達郎部長（リハビリテーション科兼任）が担当となり脊椎専門医として専念していただいています。ただ、平成30年末に小倉先生が副院長から公立南丹看護専門学校の学校長に任命されました。本来なら学校長に専念していただきたいところですが、林田部長1人だけではこれらの広範囲から来られる多人数の脊椎患者を手術しきれませんので、小倉先生には申し訳ありませんが整形外科診療と学校長職の二足のわらじを履いて頑張ってくださいとお願いいたします。

関節を担当しているのは私、藤原靖大をはじめ、琴浦義浩医長、井上聡志医長です。私は主に人工関節を担当し、平成29年は人工股関節置換術、人工膝関節置換術を合わせて45症例でした。琴浦義浩医長は小児整形とスポーツ整形を専門としており、少年野球の投球障害にも造詣が深く、ポータブル超音波装置をもって各地の野球肩肘検診を積極的に行っています。また検診だけでは無く肩関節、肘関節の関節鏡手術や、肩腱板断裂手術など上肢の手術を幅広く行っています。

関節リウマチに関しては私がリウマチ専門外来を担当し、呼吸器内科や肝臓内科のお世話になりながら生物学的製剤を導入して積極的な治療を行っています。

整形外科の病棟は第二病棟3階東病棟でしたが、平成27年に回復期リハビリテーション病棟に変更になりました。整形外科の術後にはリハビリテーションは欠かせないものであり、リハビリテーション部門とは切っても切れない縁となっています。そのため小倉先生、林田部長はリハビリテーション科も兼任されており（リハビリテーション医学会の指導医資格も持っておられます）、リハビリテーション科および回復期リハビリテーション病棟の運営も担っています。整形外科周術期の患者さんは、お隣の第二病棟3階西病棟にお世話になり、術後落ち着くと回復期リハビリテーション病棟に移動するようになったため、周術期の専門的な医療看護から回復期の専門的なリハビリテーションへの移行がスムーズにできるようになりました。

このように整形外科が関与する部署が増えてきています。リハビリテーション科のスタッフの数も私が初めて赴任した頃のPT（理学療法士）のみ4～5人であったのが、OT（作業療法士）やST（言語聴覚士）も加わり50人以上の人数になって、全員を把握するのが困難なくらいになってきました。それでもまだまだ発展して充実していけるように整形外科関連部門全員で頑張っていきたいと思っています。



（平成30年4月撮影）

近隣の連携医療機関の先生方

『開業から16年』 -その中で新たに見出した楽しみ-

三木歯科医院
院長 みき りゅういち 三木 隆一

こんにちは。京丹波町にて開業しています三木歯科医院です。生まれは大阪、育ちは千葉。都会育ちの私が矯正の認定医である家内と、現在の地に開業したのは平成15年1月。早いもので16年が経過しました。

歯科医院の立地密度が低く十分な歯科医療が行き届いているとはいえない地域で、地域住民の口腔の健康向上に役立てばと思い、縁もゆかりもない現在の地に開業しました。

歯科治療した後は、定期的なメンテナンスが欠かせません。開業当初は、治療ばかりでメンテナンスに時間が費やせませんでした。ようやく最近になって衛生士や助手の力もあってメンテナンスにも手が回るようになりました。

年々過疎化が進む地域でも、楽しみはいくらでも見出せます。学生時代は剣道部、趣味はスキーに釣りでしたが、この16年で3つ、新たに楽しみを見つけました。マラソンと畑とプチ工務店です。

マラソンを始めたのは、1階が診療所、2階が自宅で通勤に歩くことがほとんどなく太り始めたのがきっかけです。最初はやせることが目的でしたが、だんだんタイムを気にするようになり大会にも出場しました。とかく単調な日常生活の中で1つの目標を持って毎日取り組むことを仕事以外にも持てたのは良かったと思っています。

畑は自宅の周囲に毎年、大量の草が生い茂り、どうせ草の世話をするのなら何か作ろうと思い始めました。さすが京野菜といわれるくらい、気候が野菜作りにもってこいです。

プチ工務店は、空きの多い自宅の土地で野球のネット、自転車置き場、物置き、今は川べりの手すりを作っています。私はコメリの常連客です。

最後に、日頃は当院からの紹介患者さんの治療、患者さんの診療情報の提供など当院の診療業務において多大なご協力をいただきまして有難うございます。また、これからも今までと変わらないご指導、ご協力をお願いします。



『あつという間の15年』

げんの耳鼻咽喉科
院長 げんの まさみ 玄野 昌実

京都中部総合医療センターの皆様方には平素より大変お世話になっています。南丹市園部町で耳鼻咽喉科医院をしています玄野昌実といいます。平成15年5月に開院しましたので早くも15年が経過しました。はじめて園部町を訪れた時にここで開業すればのんびり出来るなと思ったのですが、開院直後は患者さんが全然来なくて（1日平均5人くらいでしょうか）このままでは閉院になると焦った事を思い出します。

何とか15年続けていけたのは地域の住民の皆様はもちろん新参者でありながら暖かく迎えて下さった船井医師会の先生方、困ったときにいつも助けていただいている京都中部総合医療センターのお蔭です。そして開院時に保育所に通園していた幼児が今年成人する事をとても嬉しく思います。

さて京都中部総合医療センターの耳鼻咽喉科におかれましては日頃より手術や検査にて大変お世話になっています。また耳鼻咽喉科は眩暈や耳鳴り、のどの異物感などの不定愁訴の多い診療科ですので、検査目的にて他の診療科へ患者さんを紹介させていただきことも多いのですが、その際とても丁寧な御返事をいただきいつも感心いたしております。

それから地域医療連携室のスタッフには、患者さんの状態に応じて臨機応変に対応していただき感謝しています。当院で出来ることは限られていますので本当に心強く思っています。とはいえ何でもお願いしては病院がパンクしてしまいますので病院と診療所の役割分担がますます重要になってくると考えます。その点当地区では病診連携の機会が多くあり安心です。また、昨年地域医療支援病院に承認され地域医療の中心となっただけの事を頼もしく思います。私も微力ではありますが少しでも地域の皆様に喜んでいただけるよう日々精進していきますので今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



カンボジアの手術活動に参加して

小児外科 かんべこうすけ
神部 浩輔

平成31年1月末に約1週間、カンボジアの首都プノンペンから車で1時間ほど郊外にある医療ボランティア団体Japan Heartが支援している病院で小児外科手術に参加してきました。

カンボジアの医療状況ですが、1970年代に知識層を中心に虐殺が行われ、医師が僅か45人となりました。その後も、医師不足のため次世代への十分な教育が出来ず、現在も国民の多くが十分な医療を受けない状況が続いています。同様に小児固形悪性腫瘍（小児癌）も治療可能な施設がない状況でしたが、2018年より今回訪問した病院が、カンボジア国内で唯一手術治療が可能な施設となりました。

私自身は今回、神経芽腫1例、腎芽腫2例の手術に助手として参加しました。病院では患者の治療費は無料で、医療物資など全て寄付で賄われており、病院スタッフが皆、限られた中で最大限の治療をしようと必死に取り組んでいました。活動に参加して、一医療人として大いにやりがいを感じましたが、一方で自分の知識・技術が小児外科医として圧倒的に不足していることを痛感しました。今後更なる研鑽を積んで、医療の届かない人達に還元したいと感じました。この文章を読んでいただいて、少しでも多くの方が世界中にまだまだ適切な治療が受けられない人達がいることを知っていただければ幸いです。

最後になりましたが、活動を行うにあたり、診療のバックアップをいただいた外科・小児外科の先生方、支援物資を提供いただいた各病棟師長や看護師の皆様に厚く御礼申し上げます。



当院の救急医療体制

当院では、24時間365日救急の患者さんを受け入れられるよう体制を整備しております。京都府より「救急告示病院」に指定され、二次救急医療機関として救急隊からの要請にも日々対応しております。

南丹医療圏には三次救急に指定されている病院がありませんが、当院は集中治療室を整備しており、第二病棟屋上のヘリポートではドクターヘリの受け入れも行っております。急性心筋梗塞や冠動脈カテーテル治療、また急性腹膜炎、腸閉塞などの急性腹症に対する緊急消化管内視鏡処置・緊急開腹手術などには24時間対応できる高次救急機能を有し、二・五次救急とも言える役割を担っています。

救急外来のお問い合わせ先

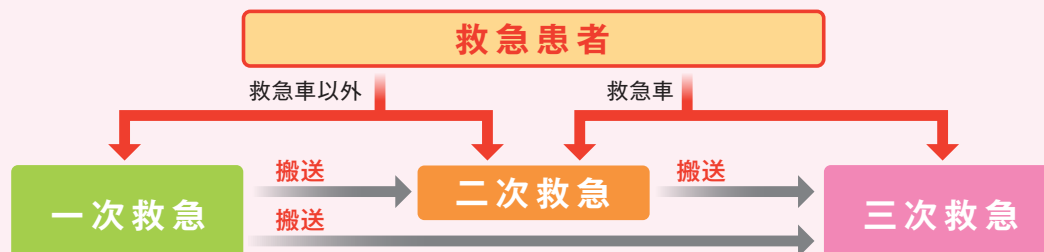
0771-42-2510(代)

24時間 365日対応



救急医療の大まかな分類

- 一次救急：比較的軽症（帰宅可能）患者に対する救急医療
- 二次救急：中等症（一般病棟入院）患者に対する救急医療
- 三次救急：重症（集中治療室入院）患者に対する救急医療



かかりつけ医を持ちましょう

かかりつけ医とは・・・

普段の健康状態を把握してしてくれるもっとも身近な「主治医」のことです。

具合が悪くなったり、困ったときにはいっばんに受診できる「かかりつけ医」を持ちましょう。



総合受付①窓口

かかりつけ医についてのご相談は

地域医療連携室 電話 0771-42-5061 (直通)

受付時間 平日8:30~17:15

看護師・助産師募集 (正職員・臨時職員)

◆看護師寮利用あり (正職員)

月額 10,480円 (税込)

* 水道光熱費込み

* 冷暖房・キッチン・バス・トイレ完備

◆院内保育所利用あり (正職員・臨時職員)

〒629-0197

京都府南丹市八木町八木上野25番地

京都中部総合医療センター 総務課人事係

TEL 0771-42-2510(代) まで

詳しくはホームページをご覧ください。



<http://www.kyoto-chubumedc.or.jp/nurse/>

編集後記

進学、移動、転勤、引っ越しなど、生活環境が変わりやすい季節がやって来ました。慣れない環境でのストレスだけでなく、寒暖差や気圧の変動により自律神経が乱れ、疲れや怠さを感じやすくなります。睡眠をしっかりとり、適度な運動やストレッチなどもとりいれてリフレッシュしましょう。

広報委員 K.M.

